

初学者の TAT（主題統覚検査）の学び方、実施前の構えについての一論考

松嶋 祐子

要約

心理臨床の初学者にとって、TAT（主題統覚検査）はとっつきにくく、敬遠されがちな投射法心理検査であると思われる。TAT についてどのように学んでいくと比較的困難なく学べるか、また、つかみどころがないと思われる実施前段階の考え方について、筆者なりに論じた。TAT を取り扱うにあたって検査者が心理臨床家として事前に学んでおくとい他の心理検査や面接に対する構えについて言及し、ひと通りの実施にあたっての留意事項を述べた。

キーワード：TAT（主題統覚検査）、投射法、初学者

1 はじめに

TAT（Thematic Apperception Test：主題統覚検査）は、マレー（Murray, H.A.）を中心とするハーバード心理学クリニックのスタッフが 1943 年に作成した人格検査法である。臨床心理学のテキストなどではロールシャッハ・テストと並んで二大投射法と位置付けられることも多いが、実際どの程度活用されているかという点、名前しか知らない、試験問題に出てくるが実物に触れたことはないという心理士が圧倒的に多いのではないだろうか。TAT は司法・犯罪領域ではよく用いられる検査であり、法務省の心理技官や家庭裁判所調査官には必須の検査ではないかと思われるし、重大事件の精神鑑定ケースでも使用頻度は高い。こうした状況下、少年鑑別所の心理技官であった筆者は幸い諸先輩方のお陰で、抵抗感なく TAT を使い始めることができた。しかしながら、こうした環境になく、名前だけはよく聞く TAT について気になってはいるものの、習得するためにどのように取り掛かったらよいかわからない人の方が遥かに多いと思われる。検査の実施後はスーパービジョンを受けるなどして TAT 経験者にプロトコルを見てもらい、様々な仮説・解釈可能性を検討していくことの繰り返しで習熟していくものであるが、まずその前段階として、はじめて実施するまでに何をすればよいかすらわからないという切実な問題があるものと考えられる。TAT の分析・解釈法については、関連書籍や論文があるのでそちらに当たっていただくとして、この論文では、まずははじめての実施に至るまでの留意事項について記したい。

想定している読者としては、大学院修士1年の後半もしくは修士2年以上からが対象となるものと考えている。臨床心理面接、心理検査に関する基本事項を学び、もしあればクライアントに接した経験のあることを前提と考えている。

さて、初心者がTATをとっつきにくいと感じてしまう点は、とにかく自由度が高すぎる点であろう。実施するに当たって、まずどのカードを選んで使えばよいのかわからない、そして教示も他の多くの心理検査のように固定されたものがなく、しかも書籍によって違うことを言っている。そして逐語記録が大変らしいし、実施時間もかなり長そうで、どのくらいかかるのかの予想も立たない。こうなると手が伸びないであろう。この論文ではそのあたりをどのように捉えたらよいか筆者なりにかみ砕いて述べて、少しでも実施してみようという気持ちになってもらうことを目的としている。

なお、本論文が言及しているTATは、マレーらの作成したハーバード版（マレー版と呼ばれることも多い）¹ についてである。また、一般的な臨床心理学のテキストでTATについて言及されているであろうことは知っている前提で進める。

2 学び始め

2.1 学び始める前に

学び始める前にまずやっておくべきことは、自分自身がTATを体験してみることである。誰かに実施してもらうのがよいが、TATの使用率を考えると周りにTATを実施してくれる人が見当たらないという場合も少なくないであろうから、自分自身でカードをめくりながら、物語を書いていく方法でもよい（坪内、1984/1997）。ロールシャッハ・テストやウェクスラー式知能検査などの習得にあたって、初学者は事前に周囲の先輩に実施してもらったり、もしくは仲間同士で実施し合うなどして、まずは被検者の体験をすることが多いだろう。それと同様である。被検者が検査を前にしたときの、不安や期待が入り混じった気持ちを理解できるであろう。また、検査を通じて自己理解できる点はセラピーの勉強における教育分析に当たるともいえる（坪内、1984/1997）。

TATを体験した後は、カードの1枚ずつをじっと眺め味わう時間も取りたい。じっと見ていると、思いも寄らない場所にはじめて見たときには気づかなかったようなものが描かれているのを見つけるなど、これまでとは違った側面も見えてきたりする。

¹ 日本においては、ハーバード版をもとに数種類の日本版が作成されている。

2.2 TAT 学習の前段階としての準備

TAT を学習する前に、事前に学んでおいた方が良いと思われる他の心理検査や臨床心理技術について述べたい。

まずは SCT (Sentence Completion Test : 文章完成法) に慣れていることは前提であるように思う。TAT のプロトコルを読むにあたって求められる感覚が、SCT の分析・解釈と近いように思われる。SCT も実はよく使われるにも関わらず、定型化された分析・解釈法というものがありあまりない検査であるが、理解したいトピックごとに、関連している項目の反応をまとめて読んでイメージを掴むといった感じであろう (黒田, 2017)。この感覚がないまま TAT の膨大なプロトコルを前にしたら、どこから取り掛かってよいか戸惑うかもしれない。それなので、まずは身構えることなく SCT を取り扱えると TAT にも接しやすいように思う。

投映法についての心構えというか取り扱い方については、ロールシャッハ・テストに習熟していることが求められるだろう。TAT の実施にあたってクライアントを前にして留意すべき点は、他の心理検査、特にロールシャッハ・テストと基本的には同じである。具体的には、座り方、記録のとり方、教示の仕方、質問の仕方、限界吟味の考え方などである。後述するが TAT の教示、質問、限界吟味はロールシャッハ・テストよりラフである。ラフだからこそ初学者にとっては不安を生じさせるようではあるが。また、曖昧刺激の提示が不安を喚起する可能性、検査の実施を避けた方がよい場合などの考え方もロールシャッハ・テストと同様である。ロールシャッハ・テストを実施したことがあれば、TAT を実施すること自体はさほど困難ではないと思われる。

2.3 書籍紹介

まずは本稿も基づいている TAT 関連書籍について紹介しておきたい。日本においては TAT に関する書籍はわずかで、しかも絶版しているものもあるという状態である。そのため、国内の TAT 関連の論文で言及される書籍はおよそ同じであり、まずそれらについて列挙しておく。なお、栗村 (2006) は主要な TAT 関連の書籍について各スタンスを比較しながら紹介している。初学者にとって、それぞれの書籍の概要を把握しやすいと思われるので一読されたい。日本における TAT の主な書籍は、以下のものである。

坪内順子 (1984/1997) 『TAT アナリシス——生きた人格診断』

日本において、かなり年月を遡るといくつか TAT 関連書籍はあったようではあるが、坪内 (1984/1997) は 1980 年以降に何冊が出版された TAT 関連書籍の中では、出発点といってよい書籍ではないだろうか。1984 年に発刊されたが絶版になり、その後 1997 年に再発刊されている。はじめに少し施行法に言及があった後、書籍の 3 分の 2 近くの頁が各カードの図版特性の

解説に割かれている。なお、坪内は後述する安香と少年鑑別所において師弟関係にあり、安香との共著論文もあり、TAT に対するスタンスは二者で似ている（あとがきを読むに、似ているというより安香の手ほどきを受けたという方が近いようである）。坪内は、TAT をロールシャッハ・テストのサイン・アプローチとなぞらえながら、各図版の標準反応などの特性を論じ、図版の知覚的把握を評価する形式分析について論じるとともに、TAT ならではの内容分析について論を展開している。

Murray, H. A. (1943) 『Thematic Apperception Test Manual』

Murray (1943) はハーバード版 TAT に付いてくるマニュアルである。21 世紀の現在でも TAT カードを購入するとこの 1943 年に書かれたマニュアルが付属してくる。薄い冊子なので、もしかしたら気に留められないまま流されてしまうかもしれないが、これぞまさに TAT のマニュアルであり、一通りのことが書かれている必読の書である。これを読むと、Murray らハーバード心理クリニックのメンバーらが、どういう趣旨でどのような過程を経て TAT を作成したのかがわかる。TAT は新たな心理検査の開発自体を目的として作成されたものではなく、Murray らが行った様々な手法を用いた一連の人格研究の中で、一つの手法として用意されたものである。この研究の成果は「人格の探求 (Explorations in Personality)」(1938 年初版) という大著としてまとめられている。そのため、現在 TAT を実施するにあたって Murray らが当時想定していたとおりの実施方法を守って検査を行う必要性はないと思われるが、その出自、意図を知っておくことは、TAT という検査の特質を理解する上で欠かせないであろう。

なお、このマニュアルの最後に TAT 図版の出展や作画者がごくごく簡単に記されているが、情報としては淡白である。その後、半世紀を経て、TAT 作成メンバーであった Morgan (1995) が図版の起源について論文を書いており、齊藤・浦田 (1997) がこの邦訳を考察を加えながら紹介している。これを読むと各図版の特徴についてより理解を深めることができるだろう。

赤塚大樹・土屋マチ (2019) 『TAT<超>入門——取り方から解釈・病理診断・バッテリー まで』

赤塚・土屋 (2019) は、TAT と銘打った書籍のなかで現在最も新しい、久方ぶりの新刊本である。タイトルに超入門とあり、A6 というコンパクトサイズであることからハンディで内容も簡単そうな印象を受けるが、中身は本格的である。後半については筆者らもまえがきで TAT が精神病理学的アセスメントにどこまで活用できるかという超応用まで載せたと書かれているが、導入部分でも精神分析に通じていることを前提にした内容が多い。精神分析学的な記述が多いのは、マレーが TAT の分析・解釈には精神分析学的な知識が基本で不可欠としていたことに、筆者らも同一のスタンスであるためである。

おそらく現在最も入手しやすい本であり、分量も多くはないので手に取っていただきたい。

現在精神分析に則った指導をしている大学院は残念ながら減少傾向にあると思われるため、多くの大学院生は聞き馴染みのない内容に難しく感じるかもしれない。超入門とあるのに知らない内容が目白押し…自分ダメかも…と落ち込んでしまわずに、怯まずに読み進めていただきたい。

安香宏・藤田宗和編（1997）『臨床事例から学ぶ TAT 解釈の実際』

安香・藤田編（1997）は、安香らの TAT 研究会での事例検討を書籍化したものである。ベテランがその手の内を明かすことをコンセプトとして事例研究会の様子が載せられている。

なお、関連論文として書籍ではないが、藤田（2000）は論文において TAT プロトコルの整理のために分析枠の活用を提案している。ちょうどロールシャッハ・テストのスコアリングシートに相当するようなものである。膨大な TAT プロトコルを取り扱うにあたっての情報整理の方法案が記されている。

山本和郎（1992）『心理検査 TAT かかわり分析——ゆたかな人間理解の方法』

山本（1992）は、書籍のタイトルに「かかわり分析」という言葉を入れている。クライアントを理解するには診断的理解と治療的理解の二つの視点があり、後者の理解の仕方の中核をなすのが「かかわり」方で、TAT は特に後者に役立つ。サインアプローチをとるロールシャッハとは異なり、TAT では標準反応という研究が不可能なくらい一人ひとりの独特な物語世界を引き出すべきだという。TAT についてはどの論者も質的な部分、個性記述的な部分を重要視しているが、山本（1992）では特にその傾向が顕著である。TAT の実施はただの検査ではないということがよくわかる一冊である。

鈴木睦夫（1997）『TAT の世界——物語分析の実際』及び鈴木睦夫（2000）『TAT パーソナリティ——二十六事例の分析と解釈の例示』

鈴木（1997）および鈴木（2000）は、1冊目が基本事項についてであり、3年後、鈴木が1冊目でやり残したことがあるように感じたということで書かれた続編では26の事例が紹介されている。この2冊は、ちょうど教科書と問題集の関係である。鈴木自身は、自身のスタンスを「直感法」と言っているが、量的分析を否定しているのではなく、むしろ各カードで出現する反応について大量のデータを示している。TAT の解釈ではわれわれは自然に個別的意味を汲み取ろうとするもので、一種の「直観法」を洗練しなければならないとしつつも、その直感がどこから生まれるかという、各カードのありふれた反応、特異な反応を知ることによるという。どちらも大変分厚い本となっているが、難解ではなく、上記の趣旨に則り各カードの特徴が非常に丹念に書かれている。特に最後の各カードの反応分類枠の膨大なデータの量は圧巻であり、TAT 研究が少ないわが国においては貴重な資料であろう。

3 実施の手続きに関連する事項

3.1 事前に準備する用具と記録や計時について

十分な枚数の記録用紙は必須で、あとは必要に応じてボイス・レコーダー、ストップ・ウォッチを揃えておくといよい。記録用紙については、他の心理検査にもいえることだが、予想以上に多く語られて用紙が足りなくなって慌てることのないように、十分に余裕を持った枚数を用意しておくといよい。TAT 専用の記録用紙というものはなく、コピー用紙などなんでも構わない。

被検者が早口で検査者の書き取りが間に合わない場合もあるので、ボイス・レコーダーがあると安心である。しかし、レコーディングされることに不安を感じる方もいるし、実施施設によってはレコーディングの許可を得る手続きが難しい場合もあると考えられる。坪内（1984/1997）や鈴木（1997）は教示等から手書きを基本にしているように思われるが、山本（1992）はレコーディングを基本としている。また、開発者のマレー（1943）はマニュアルにおいて、スクリーンの裏に記録者を用意したり、当時の録音機器を活用することを記しており、検査者が記録することによって被検者の語りが妨げられることを避けるように推奨している。被検者の様子や実施環境に応じて、レコーディング機材を用いるかどうかを判断されるといよいよだろう。

時間の測定はおよそで良く、被検者がストップ・ウォッチを目にすることで、評価されていると感じて緊張してしまうくらいならわざわざ用いずに、腕時計の秒針などで足りると考えられる。坪内（1984/1997）はどのくらい沈黙していたかなどがわかればよいとして計時せずに、沈黙は筆記の速度で「・・・・・・・・」と打ち、視覚的に捉えられる方法を取っている。

3.2 カードの揃え方

実施前の準備として、カードを裏面にした状態で、上から提示順に取れるように揃えておく。10枚全てのカードを実施するロールシャッハ・テストでは箱の中で並び順がばらばらになっていることはあまりないが、TATはその都度使用するカードが異なるため、並び順がばらばらのまま仕舞われていることが少なくない。本当は前の使用者が並び順を直して仕舞うのが検査を用いるうえでの礼儀である。また、並び順が揃えられていても、うっかりなのか、蓋を開けるとカードの表面、つまり絵が見える状態になってしまっていることもある。そのため、検査者は実施前にはカードの並び順を確認して整え、箱を開けた途端に被検者に絵が見えてしまわないようにしておく必要が思いのほか大切である。事前確認せずに箱ごと検査室に持ち込んで、決してクライアントの前でガサゴソ…なんてしないようにしたい。ちらっと見えたカードの枚数（全 31 枚）の多さに被検者がぎょっとしたり、絵が見えてしまうことで後に作るス

トリーに影響を与えてしまうおそれがある。

なお、後述するがクライアントの反応次第でカードを追加実施する可能性があるため、追加使用する可能性のあるカードも含めて箱ごと検査室に持ち込むとよい。筆者はクライアントの死角になっているテーブルの下にある椅子の座面の上などで使用するカードの束を取り出すようにしている。検査室の状況によりけりと思われるが、事前に検査者にカードが見えてしまうことなく、使用予定のカードだけを1枚ずつ提示できるように配慮することが大切である。

3.3 座り方

マレーはマニュアルにて、対象者が幼い子どもや精神疾患の者でなければ検査者は被検者の背後に座るとしており、TATが使われ始めた当初は精神分析の自由連想法に倣ってセラピストが被検者の背後に回ったり、カウチに横たわせながらというやり方がなされていたようである。しかし、現在の日本においては面接時対面で座っていることが多く、現在ではロールシャッハ・テストを実施する際の考え方と同様と思ってよいだろう。

上述の背後に座る方法を除くと、座り方には、対面、90度、被検者との横並び（180度）が考えられる。対面と180度にはそれぞれの一長一短があり、90度法はちょうどその折衷といったところである。なお、坪内（1984/1997）は90度、赤塚・土屋（2019）は対面か90度と記している。ロールシャッハ・テストの手引書で座席について確認してみると、エクスマー（2003）は、「どのような座席の配置をするにしても、対面式の配置はよくない」とまで言い切っている。その理由は、意図的でないにせよ被検者に対して非言語的な手がかりを与え、誤った構えを作り出してしまうとしている。一方で片口法では、座る位置は自由とされており、「新・心理診断法」（片口、1987）では一例として対面で座している図が掲載されており、対面は検査中の被検者の行動を観察するのに都合がよいとしている。ただし、被検者の緊張をやわらげることを何よりも考えなくてはならず、対面することで被検者に気づまりな感じを与えている場合は、この位置に固執する必要はないとしている。つまりは、被検者がリラックスして受検できるように配慮することが最優先事項であると言えよう。

その他、日光には注意が必要で、検査者の背後から差し込む光は被検者にとって落ち着きにくく、被検者が窓からの光を背にする位置関係にしたり（赤塚・土屋、2019）、直射日光はカーテンによって遮蔽したり（片口、1987）するとよい。

3.4 カード選択について

実施の事前準備として避けて通れないのがカード選択である。山本（1993）は20枚全てを使うとしているが、他の書籍は何枚かを選択して使用するとしており、選択して使用する方がオー

ソドックスであろう。カード選択の正解は1つではないので、まずはフィーリングで選んでやってみる、体験してみることだと思う。しかし、それでは初心者へのアドバイスにはならないので、心配なら事前にスーパービジョンを依頼してケース概要と心理検査によって知りたい点を伝えてカード選択の相談をするとよいだろう。しかし、ここで悩ましい点は、ベテランに聞けばすんなりカードが確定するのかという点、ベテランに聞いても8割、9割はすんなり決まっても、残りは人によって異なったり、一人の人物から複数案が出てきたりするものと思われる。なぜそうなるかという点、臨床面接を考えるとわかりやすい。クライアントを理解するために家族や友人関係、現在の職場や学校でのこと、生育歴など多岐の質問が考えられるが、現実的には時間や回数に制約のある面接において強弱を付けずに全部を聞ける訳ではない。その際、質問の選択にはケースの特性や、セラピスト側の得意なやり方、はたまた時間的制約など、クライアント側の要因、セラピスト側の要因、環境因とが複合的に絡んでくる。カード選択の考え方もこれと同様である。例えば、7BM カードは父子関係が出やすいなど、各カードの特徴によって引き出しやすい特性があるので、父子関係をアセスメントしたいクライアントに対しては7BM カードを用いようという流れで考える。ただし、そのカードにセラピストが馴染んでいないと解釈が十分に深まらない可能性があり、馴染んでないカードを無理やり使用するよりは、その検査者がふだんからよく用いているものを使用した方がよいであろう。(わかりやすくするために7BM カードを例に挙げたが、このカードはほぼほぼ基本セットなので、馴染んでいない検査者というのはあまり考えられず、TAT 経験が浅くとも特性を理解しておきたいカードである。)

カードの提示順については、基本的には番号の小さいものから提示するのがよいだろう。これについては各論者の見解は一致しているように見える。前半が比較的現実的な場面、後半の11カード以降がより非現実的な想像力を求めるカードとなっており、一般的に言って後半カードの方が反応が難しい傾向にある。ただし、例外として、最終カードとされる20カードでの反応内容が不穏でそのまま検査を終了しない方がよいと判断される場合に、追加で番号の若いまだ提示していない他のカードを提示することはある。

4 実施に当たって

4.1 実施時間について

TAT を実施してみようという気力を萎えさせる大きな要因に総実施時間の長さがあるだろう。枚数についての議論はあるが、日本の書籍においては実施にかかる総時間についての話はあまり強調されていないように思う。TAT がよく使われる司法・犯罪領域、具体的には家裁調

査官や少年鑑別所の心理技官の業務においては、1回の面接や心理検査にかかる時間が定まっているわけではなく、担当者側が業務時間をやり繰りして時間を捻出すれば、まとまった時間を確保して、じっくり面接や心理検査に取り組める状況にある。筆者も少年鑑別所に勤務していた頃は、業務自体は多忙を極めたが、ケースにかかる時間について、例えば50分しかないから、1時間以上かかることが一般的であるロールシャッハ・テストやウェクスラー式知能検査などを時間枠に収まるように無理くり時間を巻いて実施しようなどという考え方をしたことはない。しかし、司法領域以外での心理検査の実施にあたっては、時間が無制約に確保できることは少ないのではないだろうか。例えば、クリニックなどの勤務で50分が一枠だとすると、諸々のことを勘案してせいぜい二枠以内には収まってほしいという気持ちが湧くのではないか。勤務場所によっては、検査一回の実施で報酬がいくらであるという働き方もある。そういう場合は、やはり検査時間が長くなることを忌避するのは人情として自然かもしれない。ロールシャッハ・テストやウェクスラー式知能検査でも2時間を超えてくるということは少ないので、2時間を超えてくると日々の業務としては枠が取りづらいし、掛けた時間が見合わなくなってくるように思う。なにより2時間の検査に耐えられる被検者というに限られてしまうのではないか。先に述べたカード選択にあたっては、候補として考えていたカードの中から90分に収まりそうな範囲で優先順位の高いものからピックアップしていくというのが一つの現実的な考え方のように思う。坪内(1984/1997)もあっさりではあるが、「毎日の限られた仕事時間の中で、心理テストを経済的に有効に、使いこなしてゆくことは、大切なことである(p.10)」と記している。鈴木(1997)もTATカード20枚全てを使うスタンスであるのだが、日本人の反応は1枚あたり2分前後であり、40~60分で済む計算であると述べている。大元のマレー(1943)も、10枚1セットは50分で、一枚当たり5分程度としており、また、カードによって費やした時間の長短が生じないよう適宜カード間のインストラクションで方向づけるとも記しており、時間枠を意識していたような書きぶりである。時間的な指示をするのは投映法の性質にそぐわないという考え方もあるのではあるが(山本、1992)、そのためにTATが敬遠されてしまうくらいなら、こうした現実的な枠組みから実施形式を考えていくことも必要であると思われる。

4.2 教示についての考え方

TATの教示は人によってまちまちで、ロールシャッハ・テストの教示がかっちり決まっているのに比べると、初学者の中には何を言えばいいのか不安に思われる人も少なくないであろう。複数の教示案があるなか、それらに共通している考えを理解することが肝要と思われる。教示例を載せている書籍からその文言を表にまとめた。これらの教示のうち、自分にぴったり合うものがあればそのまま用いても構わない。しかしながら、検査者の年齢や性別等の基本的な属

表 各 TAT 関連書籍に記されている教示例

Murray (1943)	<p>(suitable for adolescents and for adults of average intelligence and sophistication) "This is a test of imagination, one form of intelligence. I am going to show you some pictures, one at a time; and your task will be to make up as dramatic a story as you can for each. Tell what has led up to the event shown in the picture, describe what is happening at the moment, what the characters are feeling and thinking; and then give the outcome. Speak your thoughts as they come to your mind. Do you understand? Since you have fifty minutes for ten pictures, you can devote about five minutes to each story. Here is the first picture." (suitable for children, for adults of little education or intelligence, and for psychotics) "This is a story-telling test. I have some pictures here that I am going to show you, and for each picture I want you to make up a story. Tell what has happened before and what is happening now. Say what the people are feeling and thinking and how it will come out. You can make up any kind of story you please. Do you understand? Well, then, here is the first picture. You have five minutes to make up a story. See how well you can do."</p>
坪内 (1984/1997)	<p>「これから、あなたにいろいろの人や景色の描かれた絵を見せます。この絵を見て思い浮ぶ物語を作って、私に話して下さい。……この絵の中の人は、今、何を感じ、どうしているのか、この絵の前にはどんなことがあって、この絵の後にはどうなってゆくのか、お話の筋をつけて話して下さい。……そう、ちょうど、さし絵が先にできてしまって、それに短いお話をつけないではならなくなった小説家みたいな気持ちで、頑張ってやってみて下さい。」 「お話は、だいたい5分くらいで話せる短いもので良いのです。あなたの話すことを私がこの紙に書いてゆきますので、書ける早さで、しゃべって下さい。」 「絵は、13枚くらいあります。1枚づつあなたに渡してゆきますから、1枚に1つづつお話を話して下さい。お話が終わったら絵を机に伏せて下さい。」</p>
鈴木 (1997)	<p>「これは絵を見てお話を作るというもの（検査）です。と言っても別に難しく考えるには及びません。絵がどんな場面を表しているのか、場面の中の人はどんなことを考え感じているのかを想像して言ってもらおうのです。今現在のことに加え、これまでどんなことがあって、このようになっているのか、これからどうなっていくのかなど、これまでのこと、これからのことも織りまぜて、一つの簡単なお話を作ってほしいのです。この検査は、自由に想像を働かせてやってもらうもの（検査）ですから、正しい答えとかは、いっさいありません。ですから気楽にやってください。」</p>
山本 (1992)	<p>「これから 20 枚の絵をお見せします。まずこれが最初の絵です。（図版 1 を相手に向けてテーブルにおく。相手が手にもつてもかまわない。）その絵をみて、そこから感じることをもとに自由にお話を作ってください。そこにいる人が何を感じ、何をしているのかを含んだ物語を作ってください。」</p>
赤塚 (2008) ²	<p>「これから絵を見て、お話を作っていただきます。この絵に描かれているところはどこで、登場人物は現在、何を感じ何を考えているのでしょうか。さらにこの前の場面、過去はどのようだったか。そしてこの後、将来、未来はどのようになっていくのかについて、私に語り聞かせるようにお話をつくってください。それでは、一枚目から始めてください。どうぞ。」</p>

性、どのような立場で検査を実施するのかで言葉遣いが変わってくるであろうし、被検者側の年齢や理解力、検査を行う目的などに応じて説明は変わってくる。

さらには TAT の場合、教示のみならず、はじめの数枚については、反応を終える度に検査者から再度の方向づけを行うことが少なく、追加の質疑も重要になってくる。そのため、教示で

² 本稿では紹介していないが、『TAT<超>入門』（赤塚・土屋，2019）の著者である赤塚大樹は 2008 年に『TAT 解釈論入門講義』を出版している。表内の教示は、『TAT<超>入門』内に紹介されていたものであり、筆者は残念ながら『TAT 解釈論入門講義』を入手できていない。

全てを完璧に伝えようと力む必要はない。かえって、こうした力のこもった、概して長くなりがちな教示は被検者に緊張感を与えてしまうだろう。検査者が1枚目の反応の様子を見ながら不明と思われる点を質疑していくことで、被検者もはじめになされた教示が具体的に何を求めているのか理解していくことが多い。筆者の経験でも、被検者がはじめての課題に緊張し、おっかなびっくり取り組まれているような場合、ひとまずカードの描写をして不安げに検査者の方をうかがうなどし、過去や未来への言及まではなされないことは少なくない。被検者が自発的な反応を終えたと思われる時点で、「この前には何があったでしょうか」とか、もっと簡単に「この前は？」と返すだけで十分である場合も多く、こうして少し促されながら1枚目の物語を一通り完成させ、やり方を理解され、2枚目以降は少し慣れてより自発的に物語を作られていくことが多い。この質疑については、鈴木（2002）が氏のTAT関連の2冊目の書籍の冒頭で言及している。

話をはじめの教示に戻すと、各教示でおおむね共通している内容は、話を作る検査であること、過去・現在・未来に言及してほしいこと、正解はないこと、などであろう。ただし、山本（1993）だけは敢えて過去・現在・未来に言及しないようにしており、教示は簡潔である。その理由は、敢えてこうした教示をせずとも物語れる被検者は物語るという考え方が示されている。

なお、マレーは「想像力の検査である」と述べているが、これはマニュアルをよく読むと、被検者が物語を自由連想のように解釈をされると思って防衛的になるのを避けるためであるらしい。現在の日本の心理療法の状況を鑑みると、検査、特に知能検査と言われると身構える方が多いことから、想像力の検査という能力テストを思わせるような表現は避けた方がよいと思われる。安香・藤田（2000）のコラムの中でも同様の趣旨のことが述べられている。

4.3 初学者の注意点

初学者がTATに慣れるにはまずは実施してみることを勧めるが、注意しなければならない点もある。赤塚・土屋（2019）は語らせ過ぎることの侵襲性として、ベテラン臨床心理士と研修中の大学院生が同じクライアントに対して1年の期間を開けてTATを実施したプロトコルを掲載している。これを読むと、初学者によく見られる熱心に聴こう、多く語らせようというフレッシュマンの態度が、暗に被検者に影響してか、図版との距離が取れなくなってしまう様子が見てとれる。図版はただの対象物であるのだが、不安が喚起されたことによって自我境界が脆くなり、必要以上に図版刺激から心理的な揺さぶりを受け、制御の良くない状態で語りすぎてしまうことが起きる。そして、語りすぎた内容によって更なる不安が生じ、検査終了後まで不安状態を継続させてしまうことになる（ときに不適切な行動化が起きることもある

くらいである。) 初学者は自分が一通り検査を実施できるかどうかと不安にとらわれやすいが、曖昧刺激の提示により引き起こされる被検者側の不安は、検査者が思っている以上のものである。先述の教示についての考え方のところにも記したが、初学者によく見受けられる、検査者の肩に力が入りすぎている状態は心理検査においては大抵よい結果をもたらさないように思う(面接については、初心者ならではフレッシュな熱意が功を奏することも少なくないが)。鈴木(1997)の示すように、日本人においては短い反応は少なくなく、マレーのいうような5分間の反応を引き出すように躍起になる必要はないといえよう。

4.4 検査の終わらせ方

坪内(1984/1997)は最後の20カードで心理療法の予後もわかると述べているくらい、検査の最後は重要である。20カードは比較的落ち着いた話がつくられやすい。しかしながら、最後のカードで作った話が不穏な場合は、そこで終わりにせずに、もう数枚足して仕切り直すといよい。12BGカードは人物が登場しない数少ないカードで、穏やかな話が語られることが多く、20カードが不穏な際に追加で用いられやすいカードである。

4.5 フィードバック

これはまずはTATを実施してみるという初学者向けとした主旨からは外れてくるので簡潔に留めるが、TAT検査は、物語を作った被検者にとってフィードバックされる内容が体感的にわかりやすいものであるようである。また、ラポールの取れている検査者に傾聴されながら物語を作る過程は、それ自体が治療的な過程となったりする。慣れるまでは検査の実施だけで精一杯になると思われるが、先の展望として、TAT自体による治療的側面やフィードバックに活用しやすい性質について頭に置いておくとよいだろう。

5 さいごに

ここまでつらつらと書きつらねてきた。筆者なりにかみ砕いて記載したつもりであるが、初学者にどの程度その意図が伝わっているかはわからない。TATは取り組んでみる機会さえあれば、その魅力に引き込まれる者は少なくないと思われる。そのため、この原稿がまずはTATをやってみようという気持ちを少しでも引き出せたなら幸いである。

筆者の学生時代を振り返ってみると、ロールシャッハ・テストの学習、特にinquiryの仕方を訓練する過程で、心理士の問い方がいかに相手の反応を変えてしまう可能性を含むものかを体感し、大変繊細なやり取りをしているということを学んだ。その後、実務についてみて、その

訓練で磨かれた感性は、ロールシャッハ・テストのみならず、臨床面接でのアセスメントにも役立ったと感じた。筆者は学生時代に TAT の実施までは学ぶ機会がなかったが、上記のロールシャッハのエピソードと同様に、TAT を取り扱うことによって、いかに心理士とクライアントの二者の間で相互作用が起きているかをより敏感に捉えられるようになると思う。特に TAT はサインアプローチを取るロールシャッハと比較しても、より独自の個性にアンテナを張る感性を磨くことができるように思う。

引用文献

- 赤塚大樹 (2008). TAT 解釈論入門講義 培風館
- 赤塚大樹・土屋マチ (2019). TAT<超>入門——取り方から解釈・病理診断・バッテリーまで 遠見書房
- 安香宏・藤田宗和編 (1997). 臨床事例から学ぶ TAT 解釈の実際 新曜社
- エクスナー J. E. 中村紀子・西尾博行・津川律子 (監訳) (2003). ロールシャッハ・テストワークブック 第 5 版 金剛出版 (Exner, J.E. (2001) *A Rorschach Workbook for the Comprehensive System*. 5th ed. Rorschach Workshops.)
- 藤田宗和 (2001). TAT の情報分析枠 (the Frame of Information Analysis) の提案 犯罪心理学研究、39(2)、1-16.
- 片口安史 (1987). 改訂 新・心理診断法——ロールシャッハ・テストの解説と研究 金子書房
- 栗村昭子 (2006). TAT (主題統覚検査) についての一考察 関西福祉科学大学紀要、10、55-62.
- 黒田浩司 (2017). SCT (Sentence Completion Test : 文章完成法) の臨床的活用について 山梨英和大学紀要、16、44-64.
- Morgan, W. (1995). Origin and History of the Thematic Apperception Test Images. *Journal of Personality Assessment*, 65(2), 237-254.
- Murray, H. A. (1943). *Thematic Apperception Test Manual*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 齊藤文夫・浦田洋 (1998). マアレー版 TAT 図版の起源についての一考察——Morgan 論文の翻訳に基づいて 追手門学院大学人間学部紀要、6、29-51.
- 鈴木睦夫 (1997). TAT の世界——物語分析の実際 誠信書房
- 鈴木睦夫 (2000). TAT パーソナリティ——二十六事例の分析と解釈の例示 誠信書房
- 坪内順子 (1984/1997). TAT アナリシス——生きた人格診断 垣内出版
- 山本和郎 (1992). 心理検査 TAT かかわり分析——ゆたかな人間理解の方法 東京大学出版会